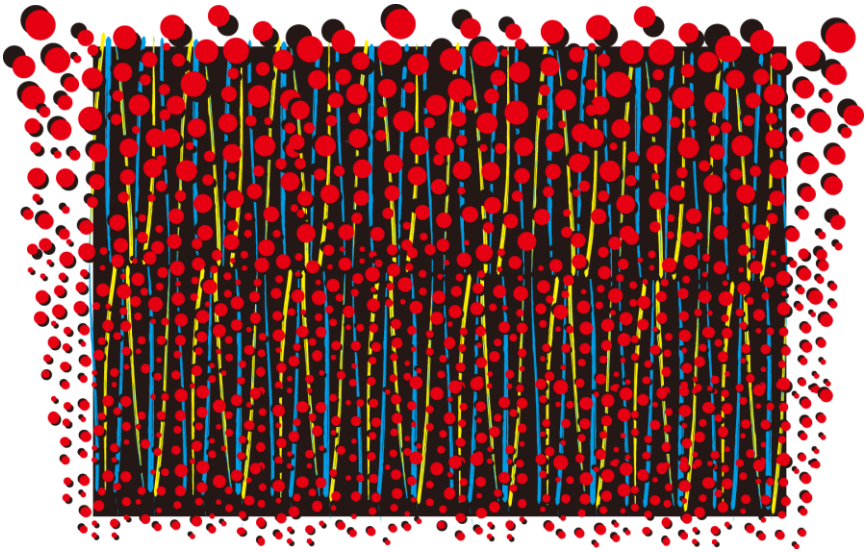
詩誌 立彩

Rissai: A Journal of Poems



第 9 号
2016 年 3 月

目次

戸張雅登　弦巻川　1
長岡の娘　2
夢より出でよ　3
池田昌子　黒鶫　4
伊東友乃　みどり　6
あの日の海から　8
ということは　10
マザーズ・フェイス　12
画図佳織　詩人の問いかけ　14
ベルリン　17
畑ゆめじ　秋の朝　20
行く人に　22
渡辺信二　幻の詩集のために　24
クリスマスへの哀歌　26
現代のマリア像　28
汚染水　30
せめてはりんごの樹　32

表紙原画　鈴木順三　表紙　「インタビジョン１」
裏表紙　「インタビジョン２」

弦巻川

戸張雅登

池袋の丸池から湧く水は
護国寺まで流れていき
神田川と合流する

今は暗渠となった弦巻川
かつての湿地は繁華街　行き交う若者たち
そびえ立つホテルメトロポリタン
石畳の西口公園　隆起する噴水

芸術劇場の地下で溢れ出る水
ヴァイオリンとピアノの調べに重なる重低音
地下水脈がこだまする

雑司ヶ谷霊園の南には弦巻通り商友会
主婦と老人がそぞろに歩く歩道の下で
弦巻川は五名の作業員を連れ去った
願わくは如意輪観音の慈悲があらんことを

長岡の娘

戸張雅登

「もう若くないから」
君のしゃがれた声が今では懐かしい
喉が弱いのに　煙の中で晩酌をしていた

若い娘たちが踊るステージ
それを眺める横顔は　愁いを帯びて
大きな黒目はスポットライトを吸収する

いつだって聞き上手だったけれど
故郷を語るときは　熱を帯びて
田中角栄を誇りにしていた

三十の誕生日を目前に　彼女は高熱で入院し
僕の見舞いを断った
「弱ってるとこ　見せたくないから」
毎日送られてくる　流動食の写真
退院したら　へぎそばでも食いに行こうか

夢より出でよ

戸張雅登

「早くしないと遅れるわよ」
そんな声が遠くでこだまして
僕は重たい目を開ける
白くぼやけた世界に降り立って
石畳を進んでも　すれ違うのは街灯だけ

家から飛び出た子どもたち
真っすぐに駆けていく　おぼろげな後姿
霧のなかで光は加減を知り
音さえも休むことを覚えたようだ

橋を越えれば二階建ての煉瓦造り
教室から漏れる青い光
時計塔がかざす灯りは霧の海を照らし
子どもたちを校舎へと導く
プリマスの授業が今日も始まる

黒鶫

池田昌子

あれは　夏の暑い日
私達は　父を葬った

その半年前　母と二人で診断結果を聞く
余命三ヶ月　肺ガンであった
わたしの身体中に
最低音Aが重く鳴り響く

父は　自分の名前の一字を私にくれた
「余程可愛かったのでしょう」
ケーキも自転車もピアノも
望めば何でも買ってくれた

父は　捨て犬を拾ってきては叱られ　野球好きで歌好きで
母には頭の上がらぬ子供だった
いったい誰のために　あんなにも忙しく働いたのだろう
せめて家族旅行くらいしたかった

弔いの日　母が誂えた黒橡に身を包み
微笑む父の写真を抱く
最低音Ａを打ち消すように
「晴れてよかった」
南風に元気な父の声が聞こえた

注）黒鶫　全身は黒色で綺麗な声で鳴くスズメツグミ科の鳥
最低音Ａ　ピアノで一番低い音『ラ』
黒橡　橡を灰汁焙煎し色付けした喪服の色

みどり

伊東友乃

空をあおぐことを　やめてから
わたしは　ずいぶん
みどりに　おおわれてしまい
じょじょに
固定されていたようだ

ひとりで　ながいこと
待ちぶせしていた
花芯には　虫たちが　うなって
そのものであることを
確かめ
先々も　うっとり　土のなかで
やわらかだ

もう　ずいぶん　人らしくあらぬ
この皮膚は　まだまだ
みどりに　そまりたがり
ひじょうに

つよく　触りたがる

ふるえる雨粒に
白くけぶる霧に

いつになっても　届かない
嘆きのなかで

また　もう一匹の虫が

あの日の海から

伊東友乃

ドアをそっと開けると
扇風機はいつのまにか
止まっていた

ターコイズブルーのシーツのうえで
昼寝している　赤ん坊が
ちいさな額を汗で光らせ
白い木綿の毛布を
むっちりした胴にからませている

あらわになった　上半身が
寝返りを打つ
びしゃんっ

と
そのとき　赤ん坊は
いっぴきの　人魚になる

海から
あの日の　海から
ふと　ぐうぜんに
わたしの子宮にもぐりこみ
育った　いのち
ひとの世界の　手前に　とどまり
二足歩行の練習から
自由に　とび　はねて

注ぎきった　母乳のかわりに
潮が流れこみ
母よりも
ひとよりも
生きながらえる

下半身がゆっくりあがり
つうっと　宙をなでる
夏のあたたまった
金の陽が
まあるくかかる

ということは

伊東友乃

いつもどおりだった
ということは

きちんと　私の日が
順番どおりに　はじまって
ちいさいな時間までが
あますところなく　とおりすぎた
ということだ

ああ　すこやかだ
よかった　今日は
やさしい樹にしか会わなかった　と
手をたたこうとさえした

だが
とつぜん　点々がやってきて
点々は人々になり

人々はうねりになり
うねりは　悪夢になった

悪夢は　業火だった

なにかが　かくじつに焼かれて
死の煩悶をみつめるまえに
私は　目覚めた

目覚めた　ということは

やさしい樹々たちが　あとかたもなく
なくなり
やさしい世界も
なんだ
ひとすじの光だった
空気のひとしずくにすぎなかった

ということは

いま　私がいる　ここは

マザーズ・フェイス

伊東友乃

殻をわったばかりの
つるつるの顔をしていました
恋という
やわやわのなかに浸されきって
いた頃でした
子を産んだあとは
日光と風にさらされることがおおくなり
うっすらと
土がかぶりはじめ
ずいぶん健やかな　草が　ぼうぼう
顔から生えはじめました
子は嬉しそうに　ひっぱるので
それが　また　ずいぶん嬉しそうなので
刈るのをやめて　放っておくと
眉のしたから
上唇のよこから　草は
みるみる　はいでてきて
ついに

ちいさな赤い花を咲かしました
それでも
子は外に出たがるので
日光と風にさらされたがるので
今日も　この母の顔のまま
靴をはきましょう
耳から伸びてくる
かさ　こそ　は
聞こえないふりをして

詩人の問いかけ

画図佳織

詩人が死んでも何も変わらなかった
電車の流れも
壊れたまま置き去りにされたビニール傘も
たくさんの顔とビルと
ガムより早く捨てられる言葉にうもれて
埃っぽい雑踏がつづいていく
雑草なんて草はない、と書いている詩を読んで
それ以来、どんな草のことも雑草と言えなくなった
はじまったばかりの初夏の
ハナミズキの葉が瑞々しい　その根元を
名前を知らない草がおおっている
真夏のように気温の上がった
五月のある一日に亡くなっていたと
あとになって知った

その日何をしていたのか思い出せない
起きて朝ご飯を済ませ　歯を磨く
顔を洗ったあとのことは

思いつきもしない
コーヒーを淹れたかもしれないし
お茶にしたかもしれない
ペットボトルの水だけ飲んで
いそいで出かけたかもしれない
どこの記録にも記憶にも残っていない
なんてこともない一日に
一人の詩人がいなくなった
言葉を不用意に信じない、
信じられる言葉は手によく馴染んだ
使い慣れたもの、
何千年も昔の人をずっと身近にするのが言葉だ、
言葉について多くの詩を遺した
寡黙な職人に似て
その日一日に必要な言葉を書きとめた
詩人の周りに
樹々の光と「明るい闇」がひろがっていく

かつて
「生まれて、しばらく生きて、／それから死ぬ。」
と書いた詩人は
「詩って、きみは、何だと思う？」

という問いかけを残して、ほんとうに死んでしまった
遺された詩集のページをひらくと
とうの昔に死んでしまった詩人たちにまじって
談笑し、
生きられなかった時代を
沈黙のうちに見つめてくる

長田弘（一九三九―二〇一五）
「明るい闇」「詩人の死」「詩って何だと思う？」

ベルリン

画図佳織

石畳にころがる犬の糞と
そのうえを飛びかう大きなハエを
夏のベルリンは
午後の中休みのなかにかかえて
風もみどりもあかるい
トルコ料理の匂いにさそわれる表通りを抜けて
レナータが大好きな小道を案内してくれる
写真をとろうと言われても
まぶしくてよく見えない
顔のうえでも腕のうえでも
産毛が金色の粒みたいにひかっている
目をほそめて画面をのぞきこむ　反動で
まっ暗になる
二〇一三年八月十六日の
時差ぼけでうわついた足もとの
スニーカーのつま先があまっている
そのぎこちなさも
一六〇〇万画素の点となって

メモリーカードの中で
揺れ　沈み
浮きあがる

シュプレー川にかかる橋は
片側だけ高架下になっていて
紙屑やジュースのパックが　踏みつぶされ
化石みたいにうごかない
煤けた柱のあいだから　見える川を
遊覧船がすすんでいく
流れる水は何もとどめておかないから
時も　川のうえでは流されるまま
記憶など気やすくはなして
短パンすがたのツアー客らが　手を振りあう
そして　交差点で

言われるまで気づかなかった
ベルリンの壁が　落書きにまみれて
立っている
マジックで書かれたくだらないサイン
こどもの頃テレビでみた　壁によじのぼる
多くの人たち

歓喜につつまれて　わけもなく圧倒された
こんな街のなかに
一夜にして壁をつくるなんて　そのとき
だれのシーツ、枕が裂かれたのか
鶴嘴を力いっぱい　振りおろす人
くだけちった破片も　いまは
もうどこにもない
命と引きかえに走って
たどりつけなかった人も
その人を射抜いた鉛の弾　乾いた銃声も
かんたんに消えてしまった

ゴルバチョフが描かれた壁のまえで写真をとる
あかいハンマーのハンドルを握る
彼の背後で　壁がふたつに割れている
わたしたちの肩ごしに
見とおせない　何ものかが
全力で駆けてくる

秋の朝

畑ゆめじ

前と後ろとにのびる並木道
朝靄の中 ぐわりと欠伸する 鉄の街並みに
そっと背を向け 歩き出す

頭上に 黄金の妖精の乱舞
感謝の歌声が 快調(アレグロ)が
青空で こだまする

宿酔に心地よい風が 通り過ぎ
ふわり 一枚のいのちが
充分に時間をかけて 宙を舞い
アスファルトに身を横たえた
死を悟った生の幸福が形作る
純白の花嫁の如き ほほえみと共に

手に取ると
この死が引き連れる 寂しい季節の冷たさが
指の皮 その奥に染み渡る

わたしは これを あの日に
未だ閉じられぬ あの日に
はさむ 栞にしよう

行く人に

畑ゆめじ

月の河
水面 ゆらす風 感じ
流れた日々に 目をやると
さいごの あなたが見えそうで

赤いマグ いっぱい
あたためたミルクの その白さに
のどを滑る その甘さに
なぜ きづかなかった
くちづけた その時の
徐々に冷めていく ぬくもり
その脆さには あまりに敏感だったが

触れた
ぬくもりが 確かに
離れ行く
実感は 未だ

moon river and me

あの日のあなたと この夜に

今日も手を振り 眠りにつく

幻の詩集のために

渡辺信二

あなたは行って、喜びをもってあなたのパンを食べ、楽しい心をもってあなたの酒を飲むがよい。神はすでに、あなたのわざをよみせられたからである。あなたは白い衣を常に身につけよ。あなたの頭に油を絶やすな。

（「伝道の書」9：7-8）

わたしは　詩のために
いつも　白いドレスを身につけ
髪には　ジャスミンを匂わせて
空でも　海でもなくて
じぶんのほうへ語っていました

でも今の世の中を見れば
正しい人が　正しさのために滅び
悪人が　悪ゆえに　この世に憚る
正しさは人に知られず弱く
悪が長くて強いようです

ですので　まだ早いとか
まだ熟していないとか

反省や躊躇に　限りがないけれど
でも　わたしも　詩集を出さねばならない

ええ　正しい人が　せめては詩のなかで
永遠に生きますように

クリスマスへの哀歌

渡辺信二

野原の向こうから見えてくるべきは
私たちを救う人
でもまだ　誰の姿も見えない

その人は　隠れているのか　それとも
草を装っているのか
人びとに踏みしだかれながら
誰も気づかれず
招魂の儀式を執り行っているのでしょうか

それとも　空気に混じって
匂いもなくて　気づかれず
人びとの胸に奥深く　染み入ってゆくのか

あるいは　光　ですか
人工のイリュミネーションが輝きを増すので
気づかないだけなのですか

どうか　姿を見せてください
かつて　あなたは　ひとの姿で
人びとと苦楽を共にされたはずです

せめては　声だけでも聞かせてください
「この人を見よ」と言われるだけで
私たち　この酷薄な生活に耐えてみせましょうから

現代のマリア像

渡辺信二

地下鉄ピカデリー・サーカス駅の
細長い洞窟のようなエスカレーターの先で
物乞いの女が　コーラの缶を差し出す
塗装の剥げて　暗く汚れた壁に背を凭せ
骨と皮だけの赤ん坊を片腕に抱いていた
ああ　ロンドン　ロンドン
おまえの姿がずうっと遠くに退き
ホームからヴァイオリンが響く

エスカレーターを駆け下りて
ニキビ顔の若者が
コーラの缶にコインを投げ込む
女が缶を揺すって　からんと音がする
若者のTシャツが　“It's not too young to die”　と断言していた

いや　こうも言えよう
“It's not too old to live”　と

ああ　ロンドン　ロンドン
おまえの洞窟の先に
ほんとうの光や音楽があるのか
せめては　どうか　母とその子に
神の祝福を！
あるいは　神の喪失を！
おそらく　どちらも同じだ
たとえ醜かろうと　厳しかろうと
生きていることが凄いことだと
おれたち　なお　言えるのだろうか

汚染水

渡辺信二

黒かった地上がすべて
灰色に変わってしまったらしい
水中に生きるぼくらは　ぼうふらのように
ふらふらと　水面に浮んで空気を吸い込み
また　水中で食べ物を探すだけです
でも　ここも　汚れを染み込ませる光が届き始めた

それは　虹のように　層を成しながら追ってきて
奇妙なことに　水中だと
体色を透明に変えるらしい
仲間たちには　既に透明になった者もいる

そうした仲間たちは　もう見えないし
わからないのだが
そもそも　怒りがなかったので
喜びがなく
哀しみがなかったので

楽しみもありませんでした

ぼくらも　透明に変わるのは　怖くはない

でも　それは　生きてきた証しになるのだろうか

せめては　りんごの樹

渡辺信二

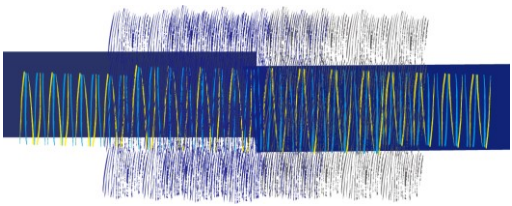
暗く喧しく　反知性が溢れ
実証性も客観性も無く
自分の欲するように理解するこの世界――
せめては　りんごの樹になりたい
りんごの樹になって
この身をころころ地面に転がしたい
この身がころころ転がれば
心を亡くして　大事なことを忘れる人たちが皆
拾って食べて　知恵をつけるだろう
それとも　忙しげに動く人たちが皆
踏み間違えて　転ぶがいい

人知れぬ悲しみは　人知れぬ美しさ
だが　草葉の陰で泣く知性には　決して　なるまい

詩誌・詩書一覧
15.07.29 から、16.2.6 のあいだに贈られた詩誌・詩書等

『リンゴの木』40、41。
『翻訳詩とエッセイ Aurora』20（最終号)。
『タルタ』34, 35。
『Gate』21。
『金木犀』18（十周年記念号)。
『のをあある』３。
『星のたね』８。
『空想カフェ』20　記念号。
『万河』14。
『光芒』76。
『白亜紀』144。

『魂魄風（まぶいかじ)』（網谷厚子）思潮社。
『文人達への哀歌』（山口敦子）土曜美術社出版販売。
『風の湧くところ』（中村邦生）風濤社。
『(かながき　し）アジサイ　の　かげ　に』（くらもち　さぶろう【倉持三郎】）日本未来派。
『ひらめきとときめきと』（詩＊秋亜綺羅　絵＊柏木美奈子）あきは書館。
『花の実』（句集、佐藤みつ江）佐藤良明編、自家版。
『和歌文学の基礎知識』（谷知子）角川選書。



詩誌『立彩』第 9 号　2016 年 3 月 1 日　頒価 300 円
編集発行　「立彩」
　〒245-8650 神奈川県横浜市泉区緑園 4-5-3
　フェリス女学院大学文学部英米文学科　渡辺信二研究室気付
印刷　東洋出版印刷株式会社　TEL 03-3813-7311